



2003年10月発行

血すじによらず

「言(キリスト)は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。」(ヨハネによる福音書 1:12~13)

血統を重んじるのは、競走馬や乳牛の世界だけのことではありません。人間の世界でもあるのです。身分制社会であったかつての日本では、何より血統がものを言いました。今日では民主化が進み、表面的には、最早血統など価値を失ったかにも見えますが、何かの時にひょいと隠れていたものが顔を出すように、これが誇りとして語り出されると言うことは、よくあることです。

選民思想と言うものは、どこの民族にもあって、ギリシャ人は自分たち以外の民族に対しては皆パルパロイ(未開人)と呼んで蔑みましたし、お隣の中国に於いても同じような中華思想と言うものがありました。ですから、選民思想は、何もイスラエル(今のユダヤ人)の専売特許と言うわけではないのですが、しかし、彼らの選民意識には他にない特別なものがありました。比類のない仕方です。神に選ばれた、信仰の人アブラハムの子孫であると言う強い自負を持っていたからです。その自負は、困難の中で彼らを支える力になったことは、間違いのないことですが、その自負が彼らを余りにも頑なな民族にしてしまったと言うこともまた、確かなことでした。イエス・キリストの先駆けをした洗礼者ヨハネは、そんな彼らに対して、『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる(マタイ 3:9)、と厳しく叱責しました。元々アブラハムが選ばれたのは、彼に特別な何かがあったからではなく、彼自身は、「滅びゆく一アラム人」(申命記 26:5)以外の何者でもなかったのです。ただ、神の憐れみが、彼の上に注がれた

に過ぎないのです。

キリストによって、神の子の資格が与えられる、と言う、一人のキリスト者が生まれる場合にも、同じことが言えるのです。血筋や血統とは何の関係もないのです。肉の欲、即ち男女の肉欲の結果生じる、通常の人間の誕生のように、誰を父とし誰を母とするか、と言うことは、このための不可欠の条件にはならないのです。更には人の欲、つまり自分であれ、親であれ、教師であれ、神の子になろうとか、神の子に育てようとか、神の子を造ろうとか、そうした人間的な意志や、願いや、野心が、たといそれが聖なる願いや野心であったとしても、神の子の誕生を可能にするのではないのです。尤もそうしたことが、全て無意味と言うものではありません。人間の願いや努力、親や教師の工夫や配慮、これらのものを、神が尊くお用いくださるであろうことは、疑いのないことです。しかし、それらが直ちに力を発揮して、それだけで神の子が造れるわけではないのです。全ては、神の御意志と計らいによることなのです。「神によって生まれる」とは、そのことを言うのです。だから誇る者は、血筋でも、親でも、自分の努力でも、特別な教師や指導者でもなく、ただただ主を誇れと言われるのです(1コリント 1:31 参照)。

この度「日本の説教」と言う、15巻のシリーズ本が刊行されることになり、既に6冊が配本されています。日本に於けるキリスト教草創期の優れた説教者たちの説教が、纏めて読めるようになったのです。喜ばしい限りです。植村正久も、内村鑑三も、山室軍平も、皆このシリーズに入っています。この人たちは皆、キリスト教とは縁もゆかりもない家に生まれ、成人してからキリスト教に出会ったのです。読んでつくづく感心するのは、手引書や参考になるものなど殆んど身近になかったあの時代に、初めてキリスト教に出会いながら、よくぞここまで福音を理解出来たものだと言うことです。神のなさる業としか思えません。

牧師 三輪恭嗣

(2003年9月7日の主日礼拝の説教より)